

平成 17 年 11 月 17 日

大久保啓次郎

福澤諭吉は侵略主義者であったか

1. 序論

「閔妃暗殺」の著者角田房子は、其の著書で福澤諭吉を「侵略主義者」と論じている。「閔妃暗殺」の取材で韓国に行き、福澤諭吉が韓国であまりにも評判が悪いので、「帰国してから、慶應義塾福澤研究センターで調べた」と書いてある。(同書 292 頁) 調べた割には余りにもお粗末な結論であるが、所詮付け焼刃なので、仕方ないだろう。「脱亜論は、朝鮮を「誘導するに値しない国」と見限ったの〔訣別の辞〕である。福澤の〔連携論〕はここで終わった。一方的に〔アジア東方の悪友〕を謝絶した福澤は、その後の 10 年間、日清戦争勃発の直前まで、朝鮮については、ほとんど言及していない。」「今さら日本の札に福澤の顔を見つけて怒るなど、意味のない事だと思う。あの時代の日本人はみな帝国主義者、侵略主義者だったので、福澤も例外ではなかった。私は最近まで脱亜論を読んでもいなかった。」というのが、角田房子の「福澤認識」である。

さらに、角田房子は其の著書「閔妃暗殺」で、次の評論を紹介している。

「[朝鮮人のために其国の滅亡を賀す] を紹介した旗田巍東京都立大学名誉教授・朝鮮史研究会会長は、[文明の名による侵略の肯定であり、其の基礎には、朝鮮は自ら文明化しえないという考えがある。これでは開化派への援助も、結局は日本の朝鮮支配の手段とならざるを得ない。] と指摘している。」 (以上は同書の 296 頁～300 頁)

2. 目的と方法

福澤がなぜ、一部の評論家に「侵略主義者」のレッテルを貼られたのか、時事新報が発刊された明治 15 年から、福澤が脳溢血で倒れた明治 31 年までの、17 年間の時事新報の中から、朝鮮及び清国の政略に関する主要な社説を、年度別に抽出して検証する。

ここで使用する全集は、現行・昭和版 (第 8 巻～16 巻) である。現行・昭和版では、明治 25 年以降の社説は、殆ど石河幹明筆という説 (平山 洋) もあるが、たとえ福澤筆でなくても福澤が気力旺盛な時期であり、他人の論説にも充分関与し得たと判断した。

明治 15 年に壬午軍乱 (守旧派と改革派の争い) が発生した時、日本は鎮圧のイニシアチブを取れず、清国に主導権を奪われた。福澤は原因が軍事力の差であり、軍備拡張が急務であると確信する。軍備拡張に関する社説が 17 年間に 29 編ある。29 編の内 24 編は明治 28 年以降の社説である。理由は明快である。日清戦争に勝利した要因は軍事

力の差である事が証明出来たからである。明治15年以降、福澤は終始一貫して軍備拡張論者であった。「防衛の為」と主張しても、「侵略的」と疑われる一要因と考える。

明治17年に発生した甲申政変（改革派によるクーデター）に福澤が関与した疑いがある（杵淵信雄著書の131～132頁）。事実とすれば「侵略的」と解釈されるであろう。

明治18年に執筆された「脱亜論」に関しては、学者・評論家の間で意見が分かれるところである。筆者は、「脱亜論」の最後の部分「支那朝鮮に接するの法も、正に西洋人が之に接するの風に従って処分す可きのみ」の解釈に問題があると考え。福澤に対して批判的な学者は、この字句を捉えて、「西洋がやっているように植民地化せよ」＝「侵略せよ」と解釈し、福澤を「侵略主義者」と決めつけている。（全集第8巻240頁最後から3行目）

「朝鮮人のために其国の滅亡を賀す」他1編（論説リスト7）は、朝鮮民族に対する批判か侮蔑か、が問われても、侵略的か否か、が問われる問題ではないと考える。

明治19年～27年前半（日清戦争勃発前後）の8年余に於ける社説には、朝鮮の独立支援、朝鮮の内政改革に関するものが多く、その中で日本は朝鮮を併呑する意思が全くない事を強く訴えている。又日清戦争は義戦であり、朝鮮の独立を護る戦争であり、清国領土の割譲を目的とする戦争ではない、と主張している。（論説リスト10～12）

しかし、明治27年後半～28年前半（日清戦争勝利直前から勝利直後）の社説には、「侵略的」と感じさせるものが多く見受けられる。勝利を目前にして「容易に和す可らず」では、安易な終戦をせず清国を徹底的に攻撃して、出来るだけ良い土地を占領せよと主張し、「眼中清国なし」と強硬な発言であり、列強諸国からの干渉を受けると、「外国干渉の説、聞くに足らず」と突っ張る。（論説リスト14～17）

いずれにしても、一般国民と同様に福澤も戦勝気分酔っており、清国に対し、「侵略的」とも思われる強気な発言をしている。（小泉信三著「福澤諭吉」の194頁）「朝鮮問題」では、朝鮮の独立を支援するには、もっと国事に干渉せよと主張する。

又「御還幸を迎へ奉る」では、日清戦争の勝利を祝して、天皇に美辞麗句を並べて賛辞を送り、天皇を賛美崇拝している。（第5項目で論説リスト18の全文を掲載する。）

明治28年後半～29年にも、戦勝気分で書いたような強気な発言があり、「侵略的」と受け取られかねない社説が多い。（論説リスト21～25、28～37の軍備拡張論）

明治30年～33年の4年間は、福澤の晩年に当たるが、戦勝気分から脱出して、本来の冷静な福澤に戻り、未だに戦勝の虚栄に酔っている国民に喝を入れる社説、清国人や清国を思いやる社説、対韓方針や対韓方略など朝鮮政略を見直す社説等々を、

書いている。(論説リスト 42、48～52)、(石坂 巖著書の 21～22 頁、33～34 頁) 相変わらず軍備拡張論(8件)の社説が多く見受けられるが、福澤の持論である「護国の為の軍備拡張」であり、「戦争の為の軍備拡張」ではない。其の一例が、「軍備は無用を目的とす可し」(明治 30 年 7 月 3 日)の社説である。(論説リスト 43)

3. 結論

福澤は、朝鮮独立党処刑後の明治 18 年と、日清戦争終了前後の 27 年後半～29 年にかけて過激で「侵略的」とも受け取られる社説を書いているが、15 年～17 年、19 年～27 年前半、30 年～33 年では、朝鮮や清国に対して友好的であり、特に晩年は、朝鮮のみならず、清国の文明開化、独立を支援しようと、極めて積極的であった。

以上のように 19 年間を通して福澤像を観察して見ると、福澤が、「日本による朝鮮領有と中国分割を積極的に唱えた侵略主義者」であった、とは考えられない。

4. 主要な論説リスト * 福澤以外の記者が書いたと推定される社説である。

(明治 15 年)

0.朝鮮の交際を論ず(3月11日)・・・時事新報に掲載された最初の朝鮮論である。

1.* 東洋の政略果たして如何せん(12月7日～12日)

この時点で福澤は日本の軍備拡張が急務であると確信する。(杵淵信雄著書の 73 頁)

(明治 18 年)

2.御親征の準備如何(1月8日)・・・「我輩の特に期望する所は御親征の準備・・・」

3.非軍備拡張論者今如何(1月29日)

4.脱亜論(3月16日)(「福澤論吉年間 29」の 33～50 頁「脱亜論とその周辺」を参照)

5.兵備拡張論の根拠(3月26日、27日)

6.朝鮮人民のために其国の滅亡を賀す(8月13日)

7.朝鮮の滅亡は其国の大勢に於て免る可らず(日付けなし)掲載されず。

8.兵備拡張(12月11日)

(明治 25 年)

9.軍艦製造費の否決に対する政府の覚悟は如何(1月12日)

(明治 27 年)

10.土地は併呑す可らず国事は改革す可し(7月5日)

11.* 日清の戦争は文野の戦争なり(7月29日)・・・文明と野蛮の戦争と定義づける。

- 12.朝鮮の独立（9月29日）「日清戦争の原因は朝鮮改革の問題にして、日本の目的は朝鮮をして支那の羈絆を脱せしめ、其の国事を改良して独立の基礎を全ふせしめ・・・」
- 13.天皇陛下の御聖徳（10月30日）・・・陛下の広島での生活状況を謙り敬った社説。
- 14.眼中清国なし（12月13日）
- 15.我豈に戦を好まんや（12月28日）

（明治28年）

- 16.容易に和す可らず（1月17日）
- 17.外国干渉の説、聞くに足らず（1月18日）
- 17.軍備拡張と外交（3月8日）
- 18.御還幸を迎へ奉る（5月30日）まさに天皇賛美の社説である。（次項目で全文掲載）
- 19.朝鮮問題（6月14日）・・・日本政府の朝鮮に対する退嬰方針（弱腰）を批判。
- 20.朝鮮の独立ますます扶植す可し（7月5日）・・・内政改革を止める事への政府批判。
- 21.軍艦製造の目的（7月16日）
- 22.軍備の充実（7月24日）
- 23.米国に軍艦を注文す可し（7月26日）
- 24.軍備拡張に対する政府の覚悟如何（8月30日）
- 25.軍備回復（9月25日）
- 26.戦死者の大祭典を挙げる可し（11月14日）
- 27.死者に厚くす可し（12月22日）

（明治29年）

- 28.軍備拡張掛念するに足らず（3月21日）
- 29.海陸並行（4月14日）
- 30.軍備と実業（4月18日）
- 31.軍備拡張に官民一致（8月11日）
- 32.尚武は日本人固有の性質なり（10月3日）
- 33.軍備拡張は戦争の用意に非ず（10月6日）
- 34.軍備は海軍を主とす可し（10月7日）
- 35.海軍拡張の急務（10月8日）
- 36.海軍拡張の程度と国力（10月9日）
- 37.戦時に於ける海軍の効用（10月13日）

（明治30年）

- 38.御大葬に就いて（1月14日）（皇太后陛下の葬儀）
- 39.海軍の士気を奮励す可し（2月12日）
- 40.内国にて軍艦の製造（2月17日）
- 41.軍備縮小説に就いて（2月25日）
- 42.戦勝の虚栄に誇る可らず（6月30日）
- 43.軍備は無用を目的とす可し（7月3日）
- 44.実業家の軍備縮小運動に就いて（11月14日）

（明治31年）

- 45.海軍拡張の外ある可らず（1月20日）
- 46.海軍拡張止む可らず（1月30日）

47.海軍拡張の必要（2月26日）

48.支那人親しむ可し（3月22日）

49.対韓の方針（4月28日）「・・・されば内政改革、独立扶植など・・・を断念して・・・」

50.対韓の方略（4月29日）「・・・多数の日本人を移住せしめ殖産興業に従事して・・・」

51.支那の改革に就いて（9月22日）「・・・今後支那の改革に就いては日本人の責任甚だ大なり。我が国人たるものは、旧来の関係と永遠の利害とを考え、・・・」

（明治33年）

52.国民自衛の覚悟（7月28日）・・・福澤が朝鮮に言及した最後の論説である。

「・・・いよいよの場合には、日本独力にても朝鮮の安全を維持する覚悟必要なり。」

5. 「御還幸を迎へ奉る」（全集第15巻172頁：全文掲載）

「本日の御還幸に付き聊か奉迎の辞を述べんとするに当り、我輩は只感激の情に迫りて殆ど言う所を知らざるものなり。抑も昨年9月大本營を廣島に進めさせられたる以来、恐れ多くも至尊の御身に艱難辛苦を厭はせられず、御眠食さへ安ぜられざる程の御次第にして、いよいよ媾和の終局を見るに至るまで凡そ一年足らずの日月間、只管軍務の事に叡慮を委ねさせられたるは、吾々臣民たるもの唯感涙の外なきのみ。我陸海の軍人が誠意誠心、死あるを知て生あるを知らず、国の為に実を軽んじて奮戦勇闘、戦えば必ず勝ち、攻むれば必ず取り、大に敵国を萎縮せしめて、日本の武勇を世界に輝したる非常の成功も、上、一人に心あれば、下、萬民は之に従ふの常にして、決して偶然の結果に非ず。之を天皇陛下の御威稜に歸し奉るに於いて誰か異辞を挟むものある可けんや。謹で案ずるに今上皇帝の御功業は実に日本開闢以来前古無比の御偉蹟にして、2500年間の歴史に其例を見る可らず。親しく王政維新の改革を御決断あらせられ、又憲法を發布して立憲政体を行はせられたる如き、従来の御大業は今更讃し奉る迄もなし。日清戦争の始末を如何と云うに、神功皇后の三韓征伐は、事、既に古くして今は成蹟の尋ぬ可き者もなく、唯歴史上の一大光榮として口碑に存するのみなれども、今度の外戦は我国未曾有大戦争にして、然かも連戦連勝、美事に日本勝利に歸して、実際の実蹟を我に収め、帝国の版図を変更するに至りしもの、畢竟明治の初年に夙に開国進取の大方針を確定あらせられ、大に西洋文明の事物を採用して、文に武に改良進歩を奨励せられたる結果に外ならず。実に今上陛下の御功業は神武天皇以後、御列世の間にも絶えて見る可らざる中興の御成業として仰ぎ奉る可きのみならず、之を世界古今に求むるも、僅々30年間の御治世に於いて、斯くの如き非常絶大の大偉蹟を収めさせられたる例はある可らず。吾々日本臣民は何の幸ぞ、生れて此盛世に逢ひ、眼前に此盛事を觀る。誰か益々感激して報効を思はざるものあらんや。唯この上は只管聖壽の萬々歳を祈り奉るのみ。」

- ①「福澤諭吉の真実」の著者平山 洋氏によれば、論説リスト 18 を含め、2、13、26、27、38 の天皇に関する社説は、全て石河幹明の筆である、と推定される。
- ②「靖国問題」の著者高橋哲哉氏によれば、論説リスト 26、27 により、日清戦争以後の戦没者は、靖国神社に合祀されるようになった。(同書の 37 頁～45 頁)

6. 福澤の朝鮮政略に関する杵淵信雄氏の見解

最後に、今回本論文の執筆に当たって参考になった、「福澤諭吉と朝鮮」の著者杵淵信雄氏の〔福澤諭吉（日本）の朝鮮政略〕に関する見解を紹介する。

杵淵氏は、同書「福澤諭吉と朝鮮」の中で次のように述べている。

「福澤の朝鮮政略の目的は朝鮮の文明化にあったが、日本の利益のための立論であったことも疑いない。駐屯兵の必要、電信確保、日本の投資による鉄道建設と鉱山開発、財政の枯渇した朝鮮政府への積極的な借款。いずれも政府の着手に先立って福澤が提案した施策である。壬午軍乱後に提唱した「国務監督官」は、日清戦争中に内政改革を遂行すべく渡韓した井上馨がその地位に任じ、日露戦争後の伊藤博文の「韓国統監」、伊藤暗殺後の日韓併合に伴う「朝鮮総督」と具体化する。名称はともかく、朝鮮植民地化の象徴的な地位となった。だからと言って、これらの提案を明治政府の朝鮮政策と一体化して捉えたのでは、福澤の論説をアジア侵略論へと矮小化しかねない。東洋全体の文明主義の確立という大前提を無視したのでは、福澤の真意を誤解することになる。それに明治政府の政策は、どの程度に侵略的であったかを論議することでは、この時代の実相には近づけない。西洋東漸の趨勢にあって先に文明化した小国（日本）が、隣国（朝鮮）の開明に関心を抱かざるを得なかった切迫した時勢にこそ、問題の焦点がある。」（杵淵信雄著「福澤諭吉と朝鮮」の 14 頁 5 行目～15 行目）

以上

（参考文献）

- | | | |
|------------------------------------|------|--------|
| (1) 福澤諭吉と朝鮮 | 杵淵信雄 | 彩流社 |
| (2) 朝鮮と福澤諭吉 | 石坂 巖 | 慶應義塾大学 |
| (3) 福澤諭吉 | 小泉信三 | 岩波新書 |
| (4) 福澤諭吉の「脱亜論」とその周辺
(福澤諭吉年間 29) | 丸山眞男 | 福澤諭吉協会 |
| (5) 福澤諭吉の真実 | 平山 洋 | 文春新書 |
| (6) 閔妃暗殺 | 角田房子 | 新潮文庫 |
| (7) 靖国問題 | 高橋哲哉 | ちくま新書 |